



第1編3章1

公共性の復権と他者についての思考

pp.46~49

ハーバーマス・アーレント・
レヴィナス・マザー＝テレサ

対話的理性

コミュニケーション的理性によって規定された主体性は、自己保存のために自己の本性が奪われることに抵抗する。コミュニケーション的理性は、道具的理性のように、盲目の自己保存に、無抵抗に包摂（ほうせつ）されることはありえない。自己保存的主体は、表象（ひょうしょう）し行為しつつ、さまざまな客体にかかわる。もしくは環境から自己を区切ることで存立維持をはかるシステムにかかわる。それに対して象徴的に構造化された生活世界は、その成員の解釈の作業のうちに構成され、ただコミュニケーション的行為を通じてのみ再生産される。コミュニケーション的理性がかかわるのは、自己保存的主体ではなく、このように象徴的構造をもつ生活世界なのである。

（ハーバーマス、川上倫逸ほか訳『コミュニケーション的行為の理論』 未来社）

活動

活動actionとは、物あるいは事柄の介入（かいにゆう）なしに直接人と人との間で行われる唯一の活動力であり、多数性という人間の条件、すなわち、地球上に生き世界に住むのが一人の人間manではなく、多数の人間menであるという事実に対応している。たしかに人間の条件のすべての側面が多少とも政治に係わってはいる。

しかしこの多数性こそ、全政治生活の条件であり、その必要条件であるばかりか、最大の条件である。……もし、人間というものが、同じモデルを際限なくくり返してできる再生産物にすぎず、その本性と本質はすべて同一で、他の物の本性や本質と同じように予見可能なものであるとするならば、どうだろう。その場合、活動は不必要な贅沢（ぜいたく）であり、行動の一般法則を破る気まぐれな介入にすぎないだろう。多数性が人間活動の条件であるというのは、私たちが人間であるという点ですべて同一でありながら、だれ一人として、過去に生きた他人、現に生きている他人、将来生きるであろう他人と、けっして同一ではないからである。

（アーレント、志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫）

他者への愛

私は、みなさまに食べ物ゆえの飢えについてお話してまいりました。しかし、この食べ物ゆえの飢えは、精神的な飢えである、愛への飢えよりもずっと取りのぞきやすいのです。これは西洋でよく見かけることですが、多くの物をもつ国である日本でも、かなりめだつことだろうと思います。

望まない、愛されない、大切にされない、忘れられたと感じ、誰もほほえみかけてくれず、誰も手を握ってくれない。このような人びとは

誰からも見捨てられているのです。それゆえ、このような精神的な飢え、精神的な貧困は取りのぞくのがよりむずかしいのです。

（マザー・テレサ、カトリック広報室監訳『生命あるすべてのものに』講談社現代新書）

〈他者〉の顔

〈他者〉が位置するのはどのような意味でも最上級の権力ではなく、まさに〈他者〉の超越という無限なものである。この無限なものは殺人よりも強いのであって、〈他者〉の顔としてすでに私たちに抵抗している。この無限なものが〈他者〉の顔であり本源的な表出であって、「あなたは殺してはならない」という最初のことばなのである。無限なものは殺人に対する無限な抵抗によって権能を麻痺（まひ）させる、この抵抗は堅固（けんご）で乗り越えがたいものとして、他者の顔のうちで、無防備なその目のまったき裸形のうちで煌（きら）めく。……そこにあるものは、きわめて大きな抵抗との関係ではなく、絶対的に〈他なるもの〉であるなにものかとの関係である。それはつまり、抵抗をもたないものの抵抗、倫理的な抵抗なのである。

（レヴィナス、熊野純彦訳『全体性と無限』下巻 岩波文庫）